

しんぱん
新版

しどうようもんしゅう
指導要文集

だいいっしょう

第一章

しんじん

信心の基本

きほん

ごほんぶつ

御本仏の大慈悲

だいいひ

にちれん ほけきよう ちげ てんだい でんぎよう せんまん いちぶん およ

日蓮が法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ

なん しの じひ 勝

ことなけれども、難を忍び慈悲のすぐれたることはおそれ

抱

をもいだきぬべし。

かいもくしよう

(005 開目抄

ごほんぶつ だいじひ

御本仏の大慈悲72ページー13行)

にちれん ほけきよう りかいりよく

てんだいだいし でんぎようだいし くら

日蓮の法華經の理解力は、天台大師、伝教大師に比べて、

せんまん いちぶん

なん しの じひ すぐ てん

千万が一分にもおよびませんが、難を忍び慈悲の勝れている点で

てんだい でんぎよう うやま いふ おそ

こころ

は、天台、伝教も敬い、畏怖（恐れかしこまること）の心をも

つでありましょう。

いちねんさんぜん

し

もの

ほとけ

だいじひ

お

ごじ

一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字

うち

たま

つつ

まつだいようち

くび

か

の内にこの珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。

によらいのめつこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしよう

006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲146ページー16行)

いちねんさんぜん

まつぼう

ひと

たい

くおんがんじよ

ごほんぶつ

一念三千をしらない末法の人びとに對して久遠元初の御本仏

にちれんだいしようにん

だいじひ

お

みようほうごじ

いちねんさんぜん

たま

(日蓮大聖人)は大慈悲を起こし、妙法五字に一念三千の球を

どくいちほんもん

だいごほんぞん

あらわ

のち

よ

ぶつぼう

みじゆく

つつんだ独一本門の大御本尊を顕して、後の世の仏法に未熟な

しゅじよう

くび

か

衆生の頸に懸けてくださったのです。

にちれん じ ひ こうだい

なんみようほうれんげきよう

まんねん

ほかみらい

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来ま

流

にほんこく

いつさいしゅじよう

もうもく

開

でもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける

くどく

むけんじごく

みち

塞

功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。

ほうおんしよう

(010 報恩抄

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲 261 ページ 10 行)

にちれん

じ ひ

ひろ

おお

なんみようほうれんげきよう

まっぽうまんねん

日蓮の慈悲が広く大きいならば、南無妙法蓮華経は末法万年

いじよう

みらいえいこう

ひろ

にほん

くに

以上、未来永劫に弘まっていくなりましょう。日本の国にあらゆ

ひと

しゅうきよう

たい

もうもく

むち

ひら

ちから

むげん

る人びとの宗教に対する盲目（無知）を開く力があり、無間

じごく

みち

地獄への道をふさぐものなのです。

ねが われ そんな こくしゅとう さいしよ みちび
願わくは、我を損ずる国主等をば、最初にこれを導か
ん。我を扶くる弟子等をば、釈尊にこれを申さん。我を
う ふぼとう し いぜん だいぜん まい
生める父母等には、いまだ死せざる已前にこの大善を進ら
せん。

(037 願仏未来記 けんぶつみらいき)

ごほんぶつ だいじひ
御本仏の大慈悲 612 ページ 3 行

ねが わたし はくがい こくしゅ さいしよ じょうぶつ みち ち ちび
願わくは私を迫害した国主たちを最初に成仏への道へ導い
てあげたいものです。日蓮を助ける弟子たちのことを釈尊（久遠
がんにょ じじゅゆうほうしんによらい ほうこく じぶん
元初の自受用報身如来）に報告しましょう。またこのような自分を

う
生んでくれた父母には、
ふぼ
生きて
いるうちにこの最高の仏法をおす
さいこう
ぶつぽう
めしたいものです。

いま にちれん い けんちようごねんみずのとうししがつにじゅうはちにち いま

今、日蓮は、去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今

こうあんさんねんたいさいかのえたつじゅうにがつ にじゅうはちねん あいだ

弘安三年太歳庚辰十二月にいたるまで、二十八年が間、

たじ みようほうれんげきよう しちじごじ にほんこく

また他事なし。ただ妙法蓮華經の七字五字を日本国の

いっさいしゅじよう くち い 励 すなわ

一切衆生の口に入れんとはげむばかりなり。これ即ち、

はは あかご くち にゆう い じひ

母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり

かんぎようはちまんしよう

(050 諫曉八幡抄

ごほんぶつ だいじひ

御本仏の大慈悲 742 ページ 3 行)

いっさいしゆじよう

どういつく

にちれんいちにん

く

一切衆生の同一苦は、ことごとくこれ日蓮一人の苦なり

もう

と申すべし。

かんぎようはちまんしょう

(050 諫曉八幡抄

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲745ページー9行)

ひと

う

くる

ぜんぶ

あらゆる人びとが受けているすべての苦しみは、全部、そのまま

にちれんひとり

くる

日蓮一人の苦しみであります。

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ
南無妙法蓮華經と唱え奉って、日本国の一切衆生を我
じようぶつ ねがい

成仏せしめんというところの願、しかしながら

によがしやくしよがん

つい

いんどう

こしん

わごう

「如我昔所願」なり。終に引導して己身と和合するを、

こんじやくいまんぞく

いま

すで

まんぞく

こころう

「今者已満足（今、已に満足しぬ）」と意得べきなり。

おんぎくでん

095 御義口伝

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

1003

ページー16行

いっさいしゅじょう

い く う

によらいいちにん

一切衆生の異の苦を受くるは、ことごとくこれ如来一人
の苦なり

（095 御義口伝 おんぎくでん

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

1056

ページー14行

ひと

しゅじゅ

くる

あらゆる人びとの種々のさまざまなすべての苦しみは、すべて

にちれん

ひとり

くる

日蓮ただ一人の苦しみでもあるのです。

いま にちれんら たぐ
今、日蓮等の類い、なんみようほうれんげきよう とな たてまつ
だいじひ ねん
南無妙法蓮華經と唱え奉る念は、

大慈悲の念なり

（095 御義口伝 おんぎくでん

ごほんぶつ だいじひ
御本仏の大慈悲
1057 ページ 13 行

にちれん もち

日蓮を用いぬるとも、あしくうやまわば国亡ぶべし。いか

悪 敬

くにほろ

すうひやくにん

憎

にど

なが

にいわんや、数百人ににくませ、二度まで流しぬ。この

くに ほろ

うたが

きん

国の亡びんこと疑いなかるべけれども、しばらく禁をな

くに

たま

にちれん

控

いま

して『国をたすけ給え』と日蓮がひかうればこそ、今まで

あんのん

法 す

ばち

は安穩にありつれども、ほうに過ぐれば罰あたりぬるな

り。

(107種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲
1239 ページー14行

にちれん もち

あ うやま

まちが

あつか

かた

日蓮を用いたとしても、悪しく敬う（間違った扱い方をする）

くに ほう

うやま

すうひやくにん

ならばかならず国は亡びるでしょう。まして敬うどころか数百人

にく

にど

るざい

くに

ほう

うたが

に憎ませ、二度まで流罪にしました。この国が滅びることは疑いが

かみがみ

と

くに

たす

たま

にちれん

ないけれども、しばらく神々を止めて国を助け給え、と日蓮がひか

いま

あんのん

どうり

えていたからこそ今まで安穩であつたけれども、道理にあわないこと

ど こ

ばち

あ

があまりにも度を越したから罰が当たってしまったのです。

様々

ようようにおわするに、御辺はその一分なり。心ざし人

勝

にすぐれておわする上、わずかの身命をささうるもまた

おんゆえ

てん

定

知

じ

たま

御故なり。天もさだめてしろしめし、地もしらせ給いぬら

ん。

との

こと

遭

たも

にちれん

殿いかなる事にもあわせ給うならば、ひとえに日蓮が

命

てん

断

たも

いのちを天のたたせ給うなるべし。

しじょうきんごどのごへんじ

ちじんぐほう

こと

(205 四条金吾殿御返事 (智人弘法の事))

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

1562

ページー16行

い けんちようごねんたいさいみずのとうししがつにじゅうはちにち

あわのくに

去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に、安房国

ながさのこおり

うち

とうじようのこう

いま

こおり

てんしやうだいじん

み

長狭郡の内、東条郷、今は郡なり。天照太神の御

廚

うだいしやうけ

た

はじ

たま

もほんだいに

くりや、右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや、

いま にほんだいいち

こおり

うち

せいちやうじ

もう

てら

今は日本第一なり。この郡の内、清澄寺と申す寺の

しよぶつぼう

じぶつどう

なんめん

うまのとき

ほうもんもう

諸仏坊の持仏堂の南面にして、午時にこの法門申しはじ

いま

にじゅうしちねん

こうあんにねんたいさいいつちのとう

ほとけ

めて、今に二十七年、弘安二年太歳己卯なり。仏は

しじゅうよねん

てんだいだいし

さんじゅうよねん

でんぎやうだいし

にじゅうよねん

四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に

しゆつせ

ほんかい

と

たも

なか

だいなんもう

出世の本懷を遂げ給う。その中の大難申すばかりなし。

さきざき

もう

よ

にじゅうしちねん

あいだ

だいなん

先々に申すがごとし。余は二十七年なり。その間の大難

は、おのおの 各々かつしろしめせり。知

（219 聖人御難事
しょうにんごなんじ

ごほんぶつ だいじひ 御本仏の大慈悲 1618 ページ 6 行

さ けんちようごねんしがつにじゅうはちにち あわ くに ちばけん ながさごおり

去る建長五年四月二十八日に、安房の国（千葉県）長狭郡のな

とうじよう ごう いま こおり

あまてらすおおみかみ

かの東条の郷、今は郡となっていますが、そこには天照太神

いせじんぐう みなものよりとも きふ にほんだいに しんりよう

（伊勢神宮）に源頼朝が寄付した日本第二の神領があり、い

にほんだいいち

こおり

せいちようじ

てら

までは日本第一になっています。この郡のなかの清澄寺という寺

しょうぶつぼう ぼう じぶつどう ほとけ あんち どう みなみがわ しょうご

の諸仏坊という坊の持仏堂（仏を安置する堂）の南側で、正午

わたし

ほうもん

なんみようほうれんげきよう

と

ことし

に、私がこの法門（南無妙法蓮華経）を説きはじめてから、今年

にじゅうしちねんめ

こうあんになん

しやくそん

しじゅうすうねん

は二十七年目で、弘安二年となりました。釈尊は四十数年、

てんだいだいし

さんじゅうすうねん

でんぎようだいし

にじゅうすうねん

のち

天台大師は三十数年、伝教大師は二十数年の後に、それぞれ

う

もくてき

さいこう

おし

生まれてきた目的（最高の教えをとくこと）をはたされました。そ

おお

なん

い

のあいだの大きな難は、それぞれに言いつくせないほどであります。

まえまえ

の

わたし

にじゅうしちねん

う

それは前々から述べてきたとおりです。私は二十七年のいま、生

もくてき

だいごほんぞん

おも

まれてきた目的（大御本尊をあらわすこと）をはたしたいと思いま

りつしゅう

おお

なん

す。立宗からこれまでのあいだにうけた大きな難は、あなたがたが

し

すでによく知っているとおります。

にちれん しゅぐ

ごほんぞん

認

まい

そうろう

日蓮、守護たるところの御本尊をしたため参らせ候こと

ししおう

劣

きよう

い

ししふんじん

も、師子王におとるべからず。経に云わく「師子奮迅の

ちから

力」とは、これなり。

(225 経王殿御返事

きようおうどのごへんじ

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

1632

ページー16行)

ほけきよう さんぜ しよぶつほっしん 杖 そうろう

法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞかし。ただし、

にちれん 杖 柱 恃 たも 陰 やま 悪

日蓮をつえはしらともたのみ給うべし。けわしき山、あし

みち 杖 倒 こと て 引

き道、つえをつきぬればたおれず。殊に手をひかれぬれば

転 なんみようほうれんげきよう しで やま 杖

まろぶことなし。南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえ

柱 たま

はしらとなり給え。

(246 弥源太殿御返事

やげんたどのごへんじ

ごほんぶつ だいじひ

御本仏の大慈悲

1699

ページー4行)

にちれん

がん

い

にちれん

まった

あやま

ここに日蓮、願じて云わく「日蓮は全く誤りなし。たと

ひがごと

にほんこく

いつさい

によにん

たす

がん

い僻事なりとも、日本国の一切の女人を扶けんと願ぜる

こころざし

捨

志はすてがたかるべし。

(265 千日尼御前御返事 (真実報恩経の事)

せんにちあまごぜんごへんじ

しんじつほうおんぎよう

こと

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

1740

ページー13行)

かしまいっ 彼の島に行き付いてありしが、彼の島の者ども、因果の

ことわり

わきま

荒

夷

荒

当

理をも弁えぬあらえびすなれば、あらくあたりしこと

もう

いちぶん

うら

こころ

は申すばかりなし。しかれども、一分も恨むる心なし。

(271 一谷入道御書

いちのさわのにゆうどうごしよ

御本仏の大慈悲 1758 ページ 10 行

ごほんぶつ

だいじひ

にちれん ちゆうごく みやこ もの

へんごく

しかるに、日蓮は中国・都の者にもあらず、辺国の

しょうぐんとう しそく

おんごく もの たみ こ そうら

將軍等の子息にもあらず、遠国の者、民が子にて候いし

にほんこくしちひやくよねん いちにん

とな そうら

かば、日本国七百余年に一人もいまだ唱えまいらせ候わ

なんみようほうれんげきよう とな そうろう

ぬ南無妙法蓮華経と唱え候

なかおきのにゆうどうしょうそく

(273 中興入道消息

ごほんぶつ だいじひ

御本仏の大慈悲

1768

ページー1行)

まこと むしこうごう けいやく じょうよしぐしろう ことわり にちれん
実に無始曠劫の契約、「常与師俱生」の理ならば、日蓮
こんどじようぶつ きへん あいはな あくしゆ だざい
今度成仏せんに、貴辺あに相離れて悪趣に墮在したもう
べきや。

(278 最蓮房御返事

さいれんぼうごへんじ

ごほんぶつ だいじひ
御本仏の大慈悲

1783

ページー5行)

にちれん せんぜ だいなん

ほけきよう さんぜ ごりやく おぼ

日蓮が三世の大難をもつて、法華經の三世の御利益を覚し

そうら

か こくおんごう

このかたみらいえいごう

めされ候え。過去久遠劫より已来未来永劫まで、

みようほうれんげきよう

さんぜ ごりやくつ

そうろう

妙法蓮華經の三世の御利益尽くすべからず候なり。

きとうきようおくりじよう

(279 祈禱經送状

ごほんぶつ だいじひ

御本仏の大慈悲

1786

ページー2行)

にちれん

う

とき

いちにちかたとき

心

安

日蓮、生まれし時よりいまに一日片時もころやすきこと

ほけきよう

だいもく

ひろ

おも

はなし。この法華經の題目を弘めんと思うばかりなり。

うえのどのごへんじ

とうじようなん

こと

(324 上野殿御返事 (刀杖難の事))

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲 1892 ページ 1 行

にちれん

う

とき

げんざい

いちにち

あいだ

日蓮は生まれた時から現在にいたるまで、一日、しばしの間も

ころ

ほけきよう

だいもく

ひろ

心がやすまったことはありません。ただこの法華經の題目を弘めよ

おも

うと思うばかりだったのです。

まっぼう

い

かしよう

あなんとう

もんじゅ

みろくぼさつとう

末法に入りなば、迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、

やくおう

かんのんとう

讓

しょうじようきよう

だいじようきよう

薬王・観音等のゆずられしところの小乗経・大乘経

ほけきよう

もんじ

しゅじよう

やまい

くすり

ならびに法華経は、文字はありとも衆生の病の薬とは

やまい

おも

くすり

浅

なるべからず。いわゆる、病は重し薬はあさし。その

とき

じようぎようぼさつしゅつげん

みようほうれんげきよう

ごじ

いちえんぶだい

時、上行菩薩出現して、妙法蓮華経の五字を一閻浮提

いっさいしゅじよう

授

の一切衆生にさずくべし。

たかはしにゆうどうどのごへんじ

(359 高橋入道殿御返事

ごほんぶつ

だいじひ

御本仏の大慈悲

1955

ページー3行)

たみ 骨 砕 はくまい ひと ち 搾
民のほねをくだける白米、 人の血をしぼれるがごとくなる
古 酒 ほとけ ほけきよう たま によにん じようぶつ
ふるさを、 仏・法華経にまいらせ給える女人の成仏
とくどう うたが
得道、 疑うべしや。

（ 378 妙法尼御返事

みようほうあまごへんじ

ごほんぶつ だいじひ
御本仏の大慈悲

1999 ページ 13 行